

(第4期:2017, 18, 19年度)

2018年度沖縄大学外部評価委員会(第4期)議事録

日時:2019年3月4日(月)18時~21時

場所:沖縄大学本館2階会議室

出席委員:(委員長)比嘉康春、(副委員長)越野康成、石原地江、平良肇、松永勝利

- 資料
- 1 資料 沖縄大学創立60周年記念事業報告
 - 2 第四次中長期経営計画自己点検・評価(3次案)
 - 3 第四次中長期経営計画から第五次中期計画へ(概要説明)
 - 3.1 第四次中長期経営計画(概要図)
 - 3.2 大学基準協会の定める大学評価基準の構成と本学の方針(第3期)
 - 3.3 沖縄大学のDPとCP
 - 4 “OKIDAI VISION 2028” & 第五次中期計画<全学計画>(案)
 - 4.1 第五次中期計画・全学計画「重点課題」「基本戦略」
 - 4.2 第五次中期計画【全学計画】における評価方法について
 - 5 第五次中期計画<部署計画>(案)
 - 6 沖縄大学外部評価委員会規程

1 開会挨拶(仲地博 学長)

昨年度に続き2回目の外部評価委員会となるが、前回の委員会では大変に参考になるご意見をいただいた。本日も忌憚のないご意見を下さいますようお願いいたします。

先ほど、石原委員から「沖縄大学は素晴らしい大学」とお褒めの言葉をいただいた。文部科学省に採択されたブランディング事業は県内では本学のみだった。事業は今年度で終了するが、引き続き沖縄大学のブランドとして「沖縄型福祉社会の共創」を展開していきたい。沖縄県が福祉政策を打つとき、沖縄大学をかましてほしいと要望が出るほど、「実践的研究は沖大」という評価が確立している。

次年度より、沖縄大学は2学部4学科から3学部5学科へ発展する。沖縄県から3億円の補助があり、県内で初めて管理栄養士を養成する「健康栄養学部」を開設する。高校生からの人気は非常に高い。山代副学長が学部長に就任する予定だ。

こども文化学科では、今年度19名の学生が現役で教員採用試験に合格した。小学校現場で、「教員になるなら沖大」と言われるようになった。今年度、過卒生を含む全学科の教採合格者は35名となった。健康スポーツ福祉専攻の活躍も目覚ましく、中学保健体育の教諭になるのは体育大学卒業生が多数だが、合格者12名のうち3名は沖大生だった。法経学科では、宅建3名、行政書士4名が現役で合格した。沖縄大学は地域や父母の期待に応えることのできる大学になりつつある。

理事長や執行部と相談してきたが、私はこの3月で学長を辞任することとなった。特に、事件・事故、病気ということではない。沖縄大学に赴任して10年、学長を5年勤めこの辺が潮時ということだ。外部評価委員の皆様には大変お世話になっている。委員の任期3年は学

長任期にあわせたものだが、皆様には引き続き任期を全うして下さるようお願いしたい。

2 委員長挨拶（比嘉 康春 委員長）

昨年 11 月の中教審答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」では、多様性の尊重、人口減少の中での社会人や留学生の受け入れ促進、地域のニーズに応える人材育成等、今後の高等教育機関の方向性が示された。いま、高大接続など大学改革が加速している。その中で沖縄大学は、仲地学長を先頭に中期計画に取り組んでいる。委員の皆様活発な議論をお願いしたい。

3 2018 年度の活動について

(1) 創立 60 周年記念事業（資料 1 参照）

事務局より、創立 60 周年記念事業として実施した施設整備（アネックス共創館・小グラウンド整備、学生食堂新設、歴史資料展示エリア設置）、記念イベント（創立 60 周年記念式典・祝賀会、同記念講座）、記念出版（沖縄大学論）、記念事業募金状況について報告がなされた。

(2) 第四次中長期経営計画から第五次中期計画へ

① 第四次中長期経営計画の総括（資料 2、3、3.1、3.2、3.3 参照）

事務局より、現行計画である第四次中長期経営計画の構成、評価指標等の説明があった。現行計画では「基本戦略 2 魅力ある授業の創造」が他の基本戦略に良い影響を与え全体を底上げしていくことを意図したが、総括にあたり、その意図が作用したのか各基本戦略の達成状況を見てもわからないのは、教育の改善について検証が難しかったからだと認識していると説明があった。また、新たに用意した「内部質保証の方針と手続」に基づき現行計画の自己点検・評価を行い、その中から出てきた伸長策や改善策を次期計画の施策に反映させることとしたと説明があった。

質疑では、比嘉委員長より、教員は自己点検・評価活動をどの程度共有しているかと発言があった。この難問に対し、事務局は、自己点検・評価活動を支援する中長期経営計画・自己点検運営委員会は執行部や各部署（学部・学科、研究科、事務部門）の長で構成しており、形式的には組織的な取組ができているはずだと返答した。仲地学長は、学部や学科の議論を積み重ねていきたいが、他の議題も多く、教員にどれだけ共有されているか不安があるとして、教職員全体会議や教職合同研修会で教職員が一堂に会し、教職員全体で計画の総括や理解を進めていく努力もしていると補足した。

また、「基本戦略 3 中退率減少」に取り組む中で原因の追究はなされているかという松永委員の質問に対し、盛口副学長は、教学 I R 委員会で教職合同チームを作り 2 年間にわたる調査を行った結果、経済的な問題に加え、家庭の事情、自分の考えていた大学生活との齟齬、相談室の利用を控えてしまっていることなど多様な原因が存在すると答えた。そして、すべてに通じる解決策は難しいが個別対応で何ができるのかを現在検討していると述べた。

かつて学習塾をされていた平良委員からは、沖大を中退してしまった教え子や本学教員から聞いたこと、ご自身の地域活動についてのお考えなどから、次の意見をいただいた。

- ・ 社会で即役立つことを求める学生が増えているのではないか。昨日の新聞に、県内旅行会社が中国からの修学旅行を受け入れるために関係機関と態勢づくりをはじめたという記事があった。例えば沖大もそうしたことに関わり、語学を使った実践的な教育の機会となれば学生はもっとやる気が出るのではないか。
- ・ 沖大は中国語に力を入れているので、中国語を活かした学科を作れないだろうか。数年前に留学生別科がなくなってしまったが、琉大では留学生の受け入れが活発化している。沖大は留学生の受け入れが少しなおざりになっていないか。
- ・ 中退の大きな原因は不本意入学だと思う。前回、小野先生は沖国大に入れなかった学生が沖大に来ていると話したが、自信を持ってない学生がいるように思う。以前、崎浜慎さんも沖大の学生は劣等感が強いと話していた。先生方が授業以外でもう少し学生をケアしていただけたらと思う。
- ・ 前回、松永委員も沖大生は元気がなくなってきたのではないかと話した。私たちが学生の頃は、ゼミの後は一杯飲みに行ったが今はそういう感じではないようだ。先生方が学生とコミュニケーションを交わす場が減っているのではないか。
- ・ 委員長も話したように、これから人口が減っていく中で大学は留学生の受け入れに力を入れていくことになると思う。留学生にとっては地元との交流も大切なことだ。私自身としても、沖大の留学生が集えるような場づくりに協力したいと思っている。

② 第四次中長期経営計画から第五次中期計画へ（資料 3 参照）

事務局より、現行計画から次期計画への展開について、次の説明があった。

- ・ 今年度から始まった大学認証評価第 3 サイクル（2018 年度-2024 年度）では、大学理念の実現と教育の質保証が重視されている。本学でも「内部質保証の方針と手続」を用意し、自己点検・評価に関わる既存の 3 委員会が連携する「全学内部質保証推進組織」を発足させ、第 3 サイクルの受審に備えることになった。
- ・ 現行計画は中長期の計画だが、次期計画では長期と中期に分けることになった。長期ビジョンは大学憲章を具現化した 10 年後の本学のありたい姿であり、5 年間の中期計画 2 回で実現を目指すことになった。
- ・ 次期中期計画は二つの柱で構成する。一つは長期ビジョンの 4 テーマをそのまま掲げ、沖縄大学の理念実現・特色化に取り組む「重点課題」である。二つ目は現行計画の主要テーマを引き継ぎ、沖縄大学の持続的運営の 4 つの要となる「基本戦略」である。
- ・ 現行計画では「魅力ある授業の創造」が他の課題を改善するエンジン役となることを期した。次期計画でもその考え方を受け継ぎ、「重点課題」が「基本戦略」に好影響していくことを期しているが、これら両輪でやっていくこととした。
- ・ 中期計画の 8 つのテーマ（重点課題：「沖大という場、沖大の教育・研究、沖大の学生像、沖大の新たな共創への挑戦」、基本戦略：「志願者、中退者、社会接続、大学運営・経営基盤」）は、そのまま年次計画のテーマとして各部署が実施していく。

- ・ 大学認証評価との関係で、現行計画は基本戦略と大学評価基準をセットにしていたが、次期計画は重点課題と基本戦略のセットとなる。
- ・ 大学評価基準と中期計画とのつなぎ方は今後検討する。大学評価基準の自己点検・評価活動は大学設置基準の面から、中期計画の活動計画は大学憲章の面から、それぞれ大学理念を実現する体系であり、双方を効果的に結び付けていきたい。

また、長期ビジョンと第五次中期計画の策定経緯について、委員会や教職員全体会議、教職合同研修など約2年間の作業を経て本日の外部評価委員会を迎えたことが報告された。

質疑では、石原委員より、中期計画と大学評価基準のそれぞれの検証を結び付けていくということだが、これまでも検証にかなりの時間をかけているようだし、実際に組織を動かすとき、検証結果を共有して何をどこから改善していくのか教員の皆さんに伝わっているのかと質された。仲地学長は、大学がP D C Aサイクルを回しているか外部機関が評価するのが大学認証評価だが、沖縄大学のP D C Aサイクルは第四次中長期経営計画から始まり、意欲が先走って多くの計画を立てたため検証作業は膨大となってしまったと振り返ったうえで、第五次では検証作業に振り回されない効率的、効果的な制度設計を目指している、と答えた。

③ 長期ビジョン “OKIDAI VISION 2028” の策定（長期ビジョンチラシ参照）

事務局より、長期ビジョン策定の趣旨と概要について、次の説明があった。

- ・ 現行計画までは中期計画と長期計画が混ざっていたが、長期の部分がおざなりだった。そこで双方を分け、長期については本学のありたい将来像として、今後10周年ごとに沖縄大学憲章を確認し、その実現に向かうビジョンを策定することとした。
- ・ 今回60周年の節目に策定した長期ビジョンは、学内外の声も参考にして「地域がキャンパス、地域のキャンパス～沖縄大学は『知』と『人』の交流拠点となります」となった。
- ・ 長期ビジョンでは4つのテーマを掲げた。大学憲章が規定する3つの目標を継ぐ3つのテーマと、それ以外に現在の状況から大学憲章を展望する1つの新たなテーマだ。
 - ① 地球市民・地域市民の共育の拠点 → 「沖縄大学という場」
 - ② 地球環境・地域環境に貢献する教育・研究 → 「沖縄大学の教育・研究」
 - ③ 共創力をはぐくむ大学教育への変革 → 「沖縄大学の学生像」
 - ④ （現況から憲章を展望する新たなテーマ） → 「沖縄大学の新たな共創への挑戦」
- ・ 長期ビジョンを実現する計画として、第五次が前期中計、第六次が後期中計となる。

④ 第五次中期計画の策定（資料4、4-1、4-2、5参照）

事務局より、次期計画策定にあたり、3つの方針を起点とする教育の質の保証に取り組んでいくこと、沖縄大学の理念実現・特色化に取り組む「重点課題」と沖縄大学の持続的運営の要となる「重点課題」の両輪で計画を構成すること等を基本方針としたと説明があり、全学計画における「重点課題」（案）及び「重点課題」（案）の要点が読み上げられた。続いて、評価方法について、「重点課題」ではインパクトがある・あったと感じられる事業を表出させ伸ば

していこうとするランキング評価を、「基本戦略」では現行計画の評価方法を継続させた目標管理型の評価を行っていくと説明があった。

質疑では、比嘉委員長より、重点課題「沖大の場」づくりにおいて国際交流に取り組んでいくとしているが、具体的にどのような計画があるのかと質問があった。盛口副学長は、本学は規模が小さく留学生の獲得に過大な目標を立てられないので、もっと学生を海外に送り出す仕組みをつくっていこうと担当と話しているとして、短期の派遣留学プログラムや海外スタディツアーを増やしたり、公募型の海外インターンシップの紹介や海外観光客を相手にしたガイド実習で語学交流に力を入れていくなど、多様な国際交流を進めていきたいと答えた。

松永委員からは、重点課題「沖大の学生像」においてインターンシップに取り組んでいくとしているが、現在の様子について質問があった。島袋学生部長は、授業の一環として中小企業家同友会の会員企業で実施していることや就職支援課が学生の要望に応じて行う正課外の取組のほか、県主催の海外インターンシップなどに自分で動いて参加している学生もいるとして、年間 50～60 人がインターンシップに参加していると答えた。松永委員は、琉球新報社にインターンシップを希望する学生は多く、県外からも問題意識のある学生が沖縄のマスコミを注目しているが、沖縄大学の学生は全然来ないので来てもらいたいと述べた。

比嘉委員長から、多様な学生に対する支援体制についても質問があった。島袋学生部長は、学生相談室に配置している専門相談員が対応していることや、性別違和を持つ学生が通称名の使用を申請する場合は基本的に本人の意志を尊重することとしていると答えた。

石原委員から、企業側にとっても人材は重要な社会資源であり、中退者が引き籠ってしまったり、転職を繰り返してキャリアを積みなくなったりするきっかけとならないようにしてほしいと意見があった。そして、経済団体との連携で考えられることとして、沖縄大学と中小企業家同友会は包括連携を組んでいるので、例えば授業で躓いたか、経済的理由かで中退させてしまうより、健康が理由でなければ休学扱いで企業でしばらく受け入れて、1年後に大学にお返しするとか、インターンシップの枠組みも含めて何かできないかと思うというアイデアをいただいた。島袋学生部長はぜひ検討したいと賛同し、仲地学長は「ご提案ありがとうございます。沖縄大学が包括協力協定を結んでいるのは那覇市と中小企業家同友会で、2 団体との連携を強化していきたい」と謝意を表した。

⑤ 3 つの方針を起点とした教学マネジメント（資料 3-2、3-3、4 参照）

事務局より、3 つの方針について、大学基準協会の定める大学評価基準は、3 つの方針を起点とした教育の質の保証を核に内部質保証をし、大学の理念・目的の実現を目指す体系となっていると説明があった。つづいて、資料 4 の最終章「第五次中期計画における全学的な 3 つの方針と教学マネジメント」の中から、「大学基準 4 教育課程・学習成果」「学基準 5 学生の受け入れ」に係る自己点検・評価の留意点及び全学内部質保証推進組織に係る教学マネジメントの重要性に触れ、今後力を入れていく必要があると述べた。

最後に、沖縄大学の DP、CP について説明があり、その中で CP における現時点での教育評価は 2 年次と 4 年次に学修成果を測定することとしていると言及があった。

質疑では、意見等はなかった。

4 全体の質疑応答

越野委員より、次のコメントがあった。

「第五次中期計画全学計画『重点課題』の評価方法について、専任教職員のアンケートで評価するというの面白い取組だと思う。これに関してもしできれば、やはり大学は内側だけではなく利害関係者の評価が重要なので、この評価の取組を学生や保護者、高校、企業にも広げてみるのも一案だろう。大学のビジョンというものは学内だけで共有するものではなく、地域社会で共有することが大切で、沖縄大学のビジョンをよく知ってもらうにはこのようなアンケートで注目してもらうということは有効だ。そういう意味で利害関係者に同じようなアンケートを2年後、3年後にでもやってみると、より地域からの理解度も深まるだろう。そういうことも考えていただけたらと思う。」

仲地学長は、「重点課題の評価方法は経営企画室の提案だったが、それに対し越野委員から評価をしていただき大変うれしい。そして利害関係者にも広め、沖縄大学に注目をしてもらうためにも有意義であろうということだ。大変貴重な提言だ」と応えた。

5 仲地学長・盛口副学長の総括コメント

仲地学長は、以下のように述べた。

「盛りだくさんの内容で、立体的に理解されるのは大変だったかもしれない。長期ビジョン、第四次中長期経営計画の自己点検・評価、次年度に始まる第五次中期計画、大学認証評価、そして3つの方針、と5つのことが絡み合った内容だった。

大学認証評価とは、文部科学省が認めた機関別認証評価機関が、加盟する大学に対して大学としての質を備えているか、自己改善できる大学であるかを評価するということだ。3つの方針とは、どのような学生に卒業を認めるのか、どのようなカリキュラムで学生を教育するのか、どのような基準で学生を受け入れるのか、ということだ。これら5つが立体的になっているので、全体像の把握は難しかったと思う。

それにしても、多くの的確なご意見をお聞きすることができた。沖縄大学に期待されていることがわかった。中国語に特化してみたらどうかというご意見、教員が率先して学生と懇親をしているのかということや自信を持っていない学生が多いのではないかとすることは、外部から見てもそういう話が出てくることを我々は心に留めなければならない。メディアに就職をしようという意欲的な学生が少ないというご意見、沖縄大学は挑戦をする学生を育てる必要があると思った。検証に時間がかかっているのではないかとご意見。大学認証評価に伝えるためには時間がかかるシステムとなっており、小さな大学は小さいなりに効率的なやり方を考えなければならない。重点課題の評価方法は面白いということで、沖縄大学が考えた評価の在り方がお目に留まって大変うれしい。これがうまくいくかどうか、事前に試行してみようということになっている。

各委員のご発言は、文字にして読み直し、沖縄大学の教育・研究・社会貢献、とりわけ教育に生かすことができるように努力をしたい。」

続いて、盛口副学長は以下のように述べた。

「大学の意味や仕組みを再考しなければならない時期に来ていると改めて思った。ご指摘の中に不本意入学者が中退につながるという話があったが、不本意入学者に対して具体的な目標を示して手立てを考える必要があるということだった。具体例として、社会との連携ができると思った。また異文化との交流が重要だという話もあった。

今日、改めて大学の中にいるだけでは気づかない視点に気づかされた。一つは、本学の関係者は中退者を大学から去っていった人たちという風にしか思えていないが、大学だけでなく社会的な損失につながってしまう恐れがあるということだ。そういう視点を持たなければならないと思った。

また、今日は大学のビジョンという話もあったが、個々の学生も、社会につながるビジョンをどう持つかということだ。学生のビジョンをどう育成するかという視点も必要であろうと思った。学生部はすでにそういう視点に立ちつつあり、就職支援課をキャリア支援課と名称を変える中で学生の意識付けをしたいと考えている。

そして大学のビジョンは大学の関係者だけではなく、地域の利害関係者からチェックを受ける必要があるということだ。これも大学の中にいると気づかない点だ。これまで沖縄大学の運営は新崎先生、桜井先生、加藤先生、仲地先生という学長の固有の資質に負っていたところがあった。これからはそういう際立った個人に頼るだけではどうにもならない。長期ビジョンを通して沖縄大学のミッションを大学の仕組みに落とし込んでいくことが始まっているのだと思う。今日はそういう気づきを与えていただいた。」

6 閉会挨拶（長濱 正弘 理事長）

長時間にわたりありがとうございました。大学内部だけでは判断できないことがあるので、今日のご意見を参考にして取組をしていきたい。経営の立場からは、やはり大学をどう存続させ発展させるかだ。大学があるということが将来の人材を育て、社会を成長させていくことになる。そのために沖縄大学の存在がある。また、沖縄大学で学んだ卒業生に母校を誇りに思ってもらえるよう、日ごろから叱咤激励をしてやっている。そういう意味でも委員の皆様のご意見を参考にしていきたい。

これから社会は激変するが、悲観的に考えることはない。沖縄の大学進学率は39%くらいだが、この数字をどう増やしていくか。進学率を上げていくことが人口減の中で重要だ。そういうことを考えながらこれからも進めていきたい。これからもよろしくお願いします。

以上（記録：後藤）